（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　長﨑 健吾

本論文は、法華宗を切り口に戦国期京都における都市民の社会的結合の特質を明らかにしようとするものである。法華宗に関する史料は中世の都市民にせまる手がかりとして従来も知られていたが、16 世紀半ばの法華一揆と都市京都の関係に議論が集中しがちであった。一方で近年の中世都市研究では、都市内部の共同体やその形成過程に注目が集まりつつある。本論文はそうした研究動向を念頭に、鎌倉後期以来の京都における法華宗教団や信徒のありかたをたどりなおすことによって、中世都市京都における共同体の形成について新たな論点の提示を試みている。

第一部「法華宗の勢力拡大過程」では、南北朝・室町期の京都の法華宗教団では複数の門流が分立していたことを明らかにする。それらは、公武権力と結びついて京都に定着していった日像門流系寺院と、都市住民に対する布教活動を通じて勢力を伸ばしていった後発門流系寺院の二つに大別されること、とくに後者が布教の手段とした「談義」とよばれる説法は、さまざまな宗派が競合する都市社会においては信徒を獲得するための有力な手段であったが、この段階では法華宗教団どうしも競合対象であったことを指摘する。

第二部「戦国期宗教勢力としての法華宗」では、分立・競合状態にあった法華宗教団が「法華宗」という一つの宗教勢力に転化していくことを明らかにする。その契機として、京都の土倉・酒屋をめぐる山門延暦寺との対抗関係と、京都支配をめざす室町幕府との軍事的な結びつきを指摘し、室町幕府の要請にもとづく軍事行動を積み重ねていく中で、諸門流の分立をふまえながらも「法華宗」としての結束が生み出されていったとする。

第三部「都市民の社会的結合と法華宗」では、まず天正 4 年（1576）の「法華宗」教団による洛中勧進に関する史料を丹念に分析し、法華信徒個々の家やその生業を析出する。その上で彼らが集住する上京の小川地域および西陣地域に注目し、大舎人座関係の史料等も照合して、これらの地域では職縁にもとづく住民の結びつきが存在し、これが法華信仰や婚姻を通じて地縁的な共同体に展開していくと論じる。

法華宗研究と中世都市研究という、いずれも蓄積の厚い二つの大きな研究潮流を架橋し、戦国期京都における共同体の形成過程を明らかにした点が本論文の成果として特筆される。研究手法という点でも、南北朝期を起点に長期的な視野に立っていること、また洛中勧進史料の分析から個々の住民や家というミクロなレベルまで分析対象にすえていることが注目される。武家や公家、寺社の被官が都市民として議論に組み込まれていないこと、いわゆる町共同体や町組の形成など、なお取り組むべき課題が残されているが、総じて本論文が独創的な成果であることは揺るがない。

以上により、本審査委員会は、本論文を博士（文学）の学位を授与するにふさわしい業績と判断した。